

子どもたちの健康な心身の発達とタバコ、そして貧困

別所文雄

日本医療科学大学保健医療学部

喫煙そのものが重大な健康問題であることは論を待たないが、副流煙にさらされる二次喫煙（SHS）者にとっても重大な健康問題である。早い子どもは中学生の頃から喫煙を始めるとは言え、多くの子どもにとってはこの SHS が問題である。いずれにしても、喫煙は子どもの発達・発育に様々な悪影響を及ぼすことが知られている。例えば、子どもの心身の健全な発達のために取り組むべく活動を行っているユニセフは、その活動の一環として、2016 年に“Clear the air for children—The impact of air pollution on children”を発表した。その中で、子どもの認知機能の発達とタバコとの関係は確立した事実であり、大気汚染を語る上でのベンチマークとしてタバコ問題を扱っている。ユニセフによれば、国際的にはタバコ問題はあまりにも当然すぎる問題で、改めて取り上げるまでもない課題で、今必要なことは、特に先進国においては“political will”の問題であるとの立場である。要するに、各国が FCTC に準拠する政策をとれば良いことで、各国での取り組みに任された状態とすることができる。

近年社会経済的格差が人々の生活におよぼす諸問題に関心が持たれている。健康に関する疫学研究においてもこの格差を交絡因子の一つとすることが研究計画上必須と言えるほどである。好ましくない生活習慣とその結果は、ほとんどが社会経済的底辺にいる人々と結びついている。その典型的なものは喫煙と肥満である。この結びつきの深刻な点は、格差と好ましくない生活習慣が、悪循環を形成していることである。この両者の結びつきの理由として意志の力の弱さを挙げる人々がいるが、始まってしまった悪循環のなかで、先にあるものが卵であるのか鳥であるのかを見失った極めて皮相な見方である。

タバコは様々な面で社会経済的レベルと密接に関係している。タバコ製品の原料である葉タバコは、発展途上国が主な産出国で、上位 5 カ国で全世界のタバコの 1/3 を産出している。特に第 5 位の産出国である Malawi は、その輸出農産物の 70% がタバコで、そこでは 5 歳くらいの子どものタバコの収穫の手伝いをさせられ、いわゆる green tobacco sickness に苦しんでいる。Malawi は最貧国の一つで、2015 の人間開発指数（HDI）で 188 カ国中 170 番目であり、国民の 40% が貧困ライン以下の収入しか得られていない。同指数 8 番目で貧困国ではない米国でも、タバコの収穫に従事するのは伝統的に子どもたちであり、その所属社会は農家の家庭を除き、地域の貧困層の児童や移民児童であると言われている。

日本たばこ産業が製造するタバコのほとんどが発展途上国からの輸入葉タバコが原料であることを考えると、タバコ問題は、子ども達の他の健康問題と同様、特にグローバルには社会経済格差の問題としても取り上げる必要がある課題となっている。

略歴

- 1969 年 9 月 東京大学医学部医学科卒業
- 1975 年 7 月～1977 年 6 月 米国留学（テネシー州メンフィス市 St. Jude Children's Hospital）
- 2000 年 4 月 杏林大学医学部 教授
- 2006 年 4 月～2008 年 4 月 日本小児科学会会長
- 2008 年 12 月 日本ユニセフ協会理事
- 2011 年 4 月 日本小児医学研究財団評議会会長
- 2013 年 4 月 日本医療科学大学 保健医療学部 教授

所属学会 日本小児科学会、日本小児科医会、日本小児保健協会、日本小児血液・腫瘍学会、日本癌学会、米國小児科学会、国際小児がん学会など

